

二〇二五年三月十五日

朝から暖かい日だった。シンジヨーには、今日の午後、予定があった。クラス友達と集まって、宿題をやるのだ。

その宿題は、昨日、突然、校長先生から出されたものだ。

昨日は、卒業式の予行練習があった。本番と同じように、卒業証書の授与があり、本番と同じように式辞があった。予行練習なので、簡単な話だと思っていた。シンジヨーたちは、

ここで宿題があることを知った。

予行練習での式辞は、およそ次のような内容だった。あくまでも、シンジヨーが覚えて

いる内容である。一本日は、入間市議会議員、入間市教育委員、会、学校運営協議会、扇小学校PTA本部の方々に来ていただき、ありがとうございます。

ただ今、百三十三人に、卒業証書を渡しました。卒業生の皆さん、卒業証書をよく見てください。この証書には、たくさんのメツ

セージが込められています。







もう一度プリントに向かった。そして、次の	家に帰り、部屋に入ってからシンジヨ一は	書き出す子はいなかった。	団学習が終わったときには、だれ一人十個を	は、全員が消した。そして、この場所での集	つき書き出した、小学校の勉強で学んだこと	ヨ一たちは、いろいろと話し合った。ついさ	一瞬、ほっとした空気が消え、またシンジ	「ここにも、願いが込められているかも」	ある。」	「最後には、八千〇〇〇号と、番号も書いて	てあるぞ」	「そういうことなら、校長先生の名前も書い	と返した。他の子も「確かに」とうなずいた。	校長先生が出すとは思えないから・・・」	「いや、こんなに簡単にできる宿題を、あの	いてきた。シンジヨ一は	サチヤは「だから何？」と不思議そうに聞	には、自分の名前が書いてある」	「当たり前かもしれないけど、この卒業証書	いたとき、シンジヨ一はあることに気付いた。	「案外、簡単だったな」とある子がつぶや	に十個の願いは書き出せた。	学習したことを思い出せば、あつという間
----------------------	---------------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------------	------	----------------------	-------	----------------------	-----------------------	---------------------	----------------------	-------------	---------------------	-----------------	----------------------	-----------------------	---------------------	---------------	---------------------



